

連載

多摩の
金融史

27

二〇世紀初頭の青梅町所在銀行

— 青梅銀行・多摩銀行・青梅商業銀行 —

小島 庸平



はじめに

明治三四（一九〇一）年、国内の銀行数は二三八五行を数えた。同年の自治体数は五八市一〇五四町一萬三四六八村だったから、一つの市や町に複数の銀行がひしめき合う場合も少なくなかった。多摩地域について言えば、明治期に八王子・青梅を中心として二〇行余りの銀行が設立されている（早川大介「地域が生んだ多摩の銀行」『多摩のあゆみ』一六七、二〇一七年）。本稿では、西多摩郡内で銀行設立が集中した青梅町の三行（青梅銀行、多摩銀行、青梅商業銀行）を比較しつつ、狭い範囲内で金融機関がどのように棲み分け、ないし競争していたのかを検討してみたい。

青梅町内の銀行については、『青梅市史』や『青梅

信用金庫史』に若干の言及があるものの、経営の実態にまで踏み込んだ検討は未だ十分に為されていない。本連載を続けてきた多摩金融史研究会では、上記の三行に関わって早川大介が三多摩の銀行設立（前掲『多摩のあゆみ』一六七号）、経営を支えた資産家（同一八六号）、武陽銀行の設立（同一八四号）について分析を加えており、筆者も西多摩郡を中心とする金融機関関係について若干の検討を試みたことがある（一六八号）。

今回は、青梅町内三行の『営業報告書』が同時期に揃う唯一の年次である明治四二（一九〇九）年上期を対象に、三行の経営と株主に関するより立ち入った検討を行うことで、銀行間の分業・競争のあり様に関する考察を加えたい。

一 三行の経営上の特徴

表1は、明治四二（一九〇九）年上期における青梅町内三行の主な経営指標を、貸借対照表（表2）と損益計算書（表3）に基づいて掲げたものである。以下、各行別に経営上の特徴を整理したい。

（一）青梅銀行

青梅銀行は明治一五（一八八二）年創業の町内最古の銀行である。明治四二年上期の時点では、資本金額では多摩銀行に劣るものの、貸付金額・預金額ともに町内一位で、最大規模の業容を誇っていた。預貸率は資本金を加味しても一〇〇%を超えるが、その分だけ積立金も多く、利益率は三行の中で最も高い。同じく三行中で配当性は最も低いものの、配当率は一割二分と最高で、高配当を出すだけの剰余金を上げていたことがうかがえる。

青梅銀行の特徴の一つは、表2中負債の側で「貯蓄預金」が計上されていることである。当時の銀行法の下では、青梅銀行のような普通銀行は預金を一口一〇円以上でないとして受け付けられず、零細貯金は普通銀行

とは別に設けられた大衆的金融機関である貯蓄銀行が受け入れるものとされていた。しかし、青梅銀行はいわゆる貯蓄銀行の兼営を行っており、零細な貯蓄を集めることができた。そのことが、預金吸収を助け、青梅銀行の経営基盤をより堅固なものにしていたと考えられる。

貸付については、割引手形が貸付金よりも多い。この時期には手形貸付が割引手形に含まれることがあり、留保が必要だが、一定の商業銀行的な側面を有していたと推測される。その一方で、表4に見られるように、土地を中心とする抵当流込物件も最多額を占めていた。実際、抵当質物別に貸付額を整理した表4によれば、青梅銀行は約六万円という最も多額の「地所及建物」を担保に取っており、このことは、大規模な山林地主を含む経営者の構成（後述）を反映しているものと考えられる。

銀行間の短期資金融通の実態を示すコルレス網についても確認しておこう。表5は、一九〇九年上期の青梅町内三行のコルレス網の展開を掲げたものである。青梅銀行は、全体として東日本を中心に中小規模の地

表1 三行の概要 (明治42年上期)

単位:円、%

	青梅銀行	多摩銀行		青梅商業
		計	二宮出張所	
創業年	明治15年	明治30年		明治22年
公称資本金	150,000	200,000	—	100,000
払込済資本金 (A)	120,000	125,000	—	100,000
諸貸付金 (B)	341,973	233,522	59,878	155,991
諸預金 (C)	165,034	92,314	20,568	53,111
諸積立金	79,120	49,500	—	6,504
純益金	15,966	11,512	2,171	6,879
預貸率	207.2	253.0	291.1	293.7
B/(A+C)	120.0	107.5	—	101.9
払込資本金利益率	13.3	9.2	—	6.9
配当性向	45.1	54.7	—	58.1
配当率	12.0	10.8	—	8.0

出所:各行『営業報告書』1909年上期より作成。

表2 三行の貸借対照表 (明治42年上期)

単位:円

	資産				負債			
	青梅銀行	多摩銀行		青梅商業銀行	青梅銀行	多摩銀行		青梅商業銀行
		本支店計	二宮出張所		本支店計	二宮出張所		
貸付金	120,862	76,045	32,828	54,367	—	3,359	—	
当座預金貸越	58,692	64,444	4,435	33,990	39,104	24,407	3,997	
割引手形	161,843	90,666	22,615	67,100	35,081	20,187	2,983	
他店へ貸	576	2,366	—	535	764	6,757	—	
預ヶ金	314	14,586	—	—	36,006	37,603	13,589	
国債証券	14,025	—	—	—	—	—	—	
勸業債券	840	6,784	—	155	—	—	—	
諸株式	4,040	3,890	—	1,050	—	—	—	
払込未済資本金	30,000	75,000	—	—	54,080	—	—	
仮勘定	—	264	—	—	16,000	5,000	—	
営業用什器	420	487	225	—	150,000	200,000	100,000	
営業用地所建物	1,100	4,316	1,316	1,192	67,800	45,000	—	
抵当流込物件	5,000	225	—	2,000	4,500	4,500	—	
金銀有高	28,581	20,497	2,021	8,769	1,520	—	65	
					5,300	—	—	
					173	1,033	195	
					—	211	11	
					—	—	41,700	
					15,966	11,512	2,171	
計	426,293	359,570	63,440	169,157	計	426,293	359,570	64,440
								169,157

出所:前表と同じ。

※青梅商業銀行では営業用什器料積立金

表3 三行の損益計算書 (明治42年上期)

単位:円

	利益			損失		
	青梅銀行	多摩銀行	青梅商業銀行	青梅銀行	多摩銀行	青梅商業銀行
利息	13,318	8,440	5,831	利息	7,724	2,246
公債利息	391	126	29	給料	846	948
株式配当金	163	329	—	旅費	68	86
勸業債券利息	22	—	—	手数料	5	8
割引料	7,620	3,715	4,536	割引料	—	—
手数料	32	371	5	雑費	635	515
雑益	204	136	97	諸税	1,391	1,220
有価証券時価見積額	1	—	—	欠損	—	472
国庫債券償還益	14	—	—	報酬金	15	15
諸税過誤納金戻入	—	—	56	純益金	15,966	11,512
前半期繰越	4,884	3,905	—	積立金	1,700	1,500
				別段積立金	100	—
				滞貨準備金	1,000	—
				賞与及交際費	1,015	750
				配当金	7,200	6,300
				後期繰越	4,951	2,962
計	26,649	17,021	10,553	計	26,649	17,021
						10,553

出所:前表と同じ。

表4 三行の抵当質物別貸付額

抵当質物 種類	青梅銀行		多摩銀行				青梅商業銀行	
			本店		出張所			
	円	%	円	%	円	%	円	%
国債証券	19,869	11.1	3,533	3.4	1,120	3.0	1,850	2.1
会社債権	0	0.0	265	0.3	832	2.2	0	0.0
勸業債券	690	0.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0
諸株券	49,794	27.7	37,529	36.4	4,280	11.5	23,655	26.8
商品	14,703	8.2	9,604	9.3	21,116	56.7	17,296	19.6
地所及建物	60,207	33.5	35,486	34.4	7,880	21.1	25,461	28.8
信用	34,292	19.1	16,810	16.3	2,035	5.5	20,094	22.7
合計	179,555	100.0	103,226	100.0	37,263	100.0	88,356	100.0

出所：前表と同じ。

表5 三行の明治42年上期におけるコルレス網

所在地	青梅			多摩			青梅商業		
	銀行	資本金 (円)	支店	銀行	資本金 (円)	支店	銀行	資本金 (円)	支店
東京市	左右田銀行	30万	東京 東京	第百銀行	200万	四ツ谷 本所			
	第三十六銀行	70万		明治商業銀行	380万				
	東京農商銀行	20万		明治商業銀行	380万				
			明治商業銀行	380万					
西多摩	羽村銀行	10万	福生	五日市銀行	20万	狭山商業銀行 成木銀行	7万		
	氷川銀行	5万		氷川銀行	5万		5万		
北多摩				多摩農業銀行	15万	立川			
八王子	第三十六銀行	70万		第三十六銀行	70万	八王子			
				五日市銀行	20万				
埼玉	所沢銀行	50万	飯能	川越商業銀行	30万	飯能			
	第三十六銀行	70万		入間銀行	45万				
	飯能銀行	50万		入間銀行	45万				
				飯能銀行	50万				
				所沢商業銀行	30万		入間川		
		川越商業銀行	30万						
神奈川	左右田銀行	30万	神奈川 寿町 松ヶ枝町						
	左右田銀行	30万							
	左右田銀行	30万							
	左右田銀行	30万							
	相模共栄銀行	20万							
川崎銀行	20万								
静岡	御殿場銀行	10万							
山梨	若尾銀行	50万		有信銀行	60万				
	上野原銀行	15万							
群馬	三十九銀行	35万		前橋商業銀行	5万				
千葉	第九十八銀行	24万							
石川				明治商業銀行	380万	金沢			

出所：各行『営業報告書』、大蔵省『銀行総覧』1910年より作成。

方銀行との取引を行っており、特に取引店数から見た中心的な存在は、横浜に本店を置く左右田銀行であった。青梅銀行が横浜港を通じた繊維製品輸出と一定の関係を持っていたのであろう。

また、東京方面では、東京農商銀行との取引が確認できる。同行は南千住に本店を置き、同地の貨物駅である隅田川駅は、東北地方へ出荷される木材の積出駅であった。同行は大正六（一九一七）年に任意解散に追い込まれるが、西川材木商組合から要請を受けた飯能銀行によって同行の店舗が買収されている（『埼玉銀行史』）。東京農商銀行は木材取引と深く関わった銀行であり、青梅銀行による木材関連金融を通じてつながりができたものであろう。この点からも、三田村の山林地主との関係がうかがわれる。なお、複数年で『営業報告書』を確認できる多摩銀行も含めて、前後の時期のコレレス網と大きな差はないため、ここでは一期分の掲載に留めた。

（二）多摩銀行

多摩銀行は、資本金額では青梅町内最大規模の銀行であったが、明治三〇（一八九七）年創業の最後発だ

ったこともあり、取引量は青梅銀行に一步劣っていた。同行の大きな特徴の一つは、他の二行と異なり、本店とは別に二宮出張所を構えていたことだった。表1に見られるように、二宮出張所は本店以上のオーバーローンとなっており、預金吸収というよりは貸付先の確保に貢献するものだった。

『東京府西多摩郡―第一回郡勢一斑』（大正三年）によれば、同行の出張所があった西多摩郡東秋留村は、現在のおきる野市東部にあり、多摩川と秋川の合流地点にほど近く、郡内最大の水田面積を擁していた。小規模ながら織物工場や煉瓦工場の存在を確認でき、二宮市場は絹織物市場としては青梅絹布市場に次ぐ第二の取引規模を有していた。こうした一定の商工業の集積に対して、東秋留村周辺の銀行は約八km離れた西多摩郡五日市町の五日市銀行か、多摩川対岸の多摩農業銀行（北多摩郡大神村）か羽村銀行しかなく、同村の商工業者たちにとって二宮出張所の存在は重要であったと考えられる。

ただし、本店から遠方に位置する出張所での融資態度は、情報の非対称性の大きさから、慎重なものにな

らざるをえない。二宮出張所の貸付は、表4に見られるように商品担保が過半を占め、その比率は他と比較しても格段に高かった。これに対応して、多摩銀行の倉庫は本店に一棟、出張所に二棟と、出張所の方が多い。本店からやや遠方であるがゆえに、米穀や絹布などを担保にとった貸付を展開していたのであろう。

表5で多摩銀行のコレレス網を見ると青梅銀行と同様、東日本を中心にコレレス網を展開していたことが確認できる。ただし、神奈川県所在銀行との取引は皆無で、東京市中心部の明治商業銀行・第百銀行といった相対的に規模の大きな銀行との取引の存在感が大きかった。後述するように、多摩銀行は青梅町や調布村の織物業者との関係が深く、その主な生産物は主に国内で消費された布団の布地である夜具地であった。多摩銀行との取引がある織物業者にとって、国内市場との取引が重要だったことに対応するものであろう。

(三) 青梅商業銀行

青梅商業銀行は、明治二二（一八九九）年に質会社として創業し、明治四一（一九〇八）年に青梅商業銀行に改組された。頭取は西多摩郡箱根ヶ崎村の織物買

継商である村山平三郎で、同村に本店を置く狭山商業銀行の頭取も兼任していた。規模としては青梅町内最小で、表1・2を見る限り、経営内容も良好とはいえない。割引手形を中心に貸付額はそれなりにあるものの、預金は当座預金が圧倒的に多く、預貸率は多摩銀行二宮出張所に近い。表4によれば、信用貸付・商品担保貸付の比率が三行で最も高く、村山平三郎の機関銀行的性格ないし狭山商業銀行の支店的な性格を帯びていたことを推測させる。

また、表5でコレレス網を確認すると、西多摩郡内の狭山商業銀行および成木銀行に限られている。規模の小ささからコール市場に本格的に関わることは困難で、特に狭山商業銀行との密接な関わりの中で短期的な資金調整を行っていたと考えられる。

二 三行の経営者と株主

(一) 経営者

表6は、主に国立国会図書館の次世代デジタルライブラリーを利用して、青梅町内三行の経営者の性格を判明する限り整理したものである。

この時点での青梅銀行の頭取は、西多摩郡三田村の酒造業者・山林地主であり、青梅鉄道取締役でもあった小澤芳重である。その他、織物買継商や青梅染色取締役といった繊維業関係者に、在地の地主・醸造業者を加えた構成となっている。経営者の自己名義による持株数は少ないものの、後述する表8に見られるように、彼らの息子の世代が二〇〇株前後の大株主となっていた（小澤太平二二六株・平岡久左衛門一九六株など）。同時代の多くの地方銀行と同様、所有と経営の分離が十分に進んでいたとはみなしがたいだろう。

多摩銀行の頭取は、青梅町の金融業者で郵便局長も務めた地主である山崎喜右衛門だった。山崎を含む質業者が計三名役員に名を連ねており、この点は村外の資産家への依存度が高く、質業者が取締役に存在しない青梅銀行とは対照的である。

また、多摩銀行取締役の井上倉吉は、青梅織物同業組合長を務め、後に多摩銀行頭取に就任する人物である。二宮出張所所在地である東秋留村から入った二名の取締役の職業は農・地主で、共に非商工業者であった。また、材木販売業者が一名取締役に入っており、

表6 三行の役員とその属性

銀行	役職	氏名	住所	所有株数 (株)			総出資額 (円)	職業
				青梅	多摩	青商		
青梅銀行	取締役頭取	小澤芳重	三田村	30			1,500	酒造業、青梅鉄道取締役
	取締役	平岡実興	青梅町					—
	取締役	堀内氏通	青梅町				—	士族
	取締役	並木武三郎	青梅町				—	青梅染色取締役
	監査役	田村半十郎	福生村	297			14,850	農、酒造業、青梅鉄道取締役
	監査役	林正樹	三田村	140	50		9,500	旅人宿業
多摩銀行	取締役頭取	山崎喜右衛門	青梅町		122		6,100	農業、金銭貸付業、質業、郵便局長
	取締役	井上倉吉	調布村		77		3,850	青梅織物同業組合長
	取締役	森田林三郎	東秋留村		77		3,850	地主
	取締役	野村五兵衛	吉野村	55	30	40	6,250	質屋、材木販売業
	取締役	内田嘉右衛門	東秋留村		30		1,500	農
	監査役	野崎伴蔵	霞村		90	44	6,700	質屋、青梅商業銀行取締役
	監査役	木村源兵衛	氷川村		30	44	3,700	氷川銀行頭取
	監査役	橋本福次郎	青梅町		50	20	3,500	青梅運送社長
青梅商業銀行	取締役頭取	村山平三郎	箱根ヶ崎村	27		95	6,100	織物買継商、狭山商業銀行頭取
	取締役	島田卯三郎	小曾木村		10	55	3,250	農
	取締役	野崎伴蔵	霞村		90	44	6,700	質屋、多摩銀行監査役
	取締役	市川正平	三田村		20	20	2,000	質屋
	監査役	宮岡兵吾	大久野村	27	30	22	3,950	医師
	監査役	加藤莊三郎	入間郡金子村		15	20	1,750	飯能銀行取締役、飯能貯蓄銀行取締役
	監査役	福島小三郎	青梅町	17		20	1,850	機業

出所：『日本信用録 6版』1915年、『京浜信用録』1908年、『武蔵国三多摩郡公民必携名家鑑』1897年、『日本紳士録 第3版』、『銀行会社要録 第4版』1897年、『信用カード—府県別 東京府』1918年、『日本商工營業録（第1版）』1898年、『日本織物人名録』1926年、『人事興信録 4版』1915年、『日本東京医事通覧』1901年、早川大介「戦前多摩の資産家と金融機関」『多摩のあゆみ』186、2022年より作成。

共に木材の流送に使われた多摩川・秋川の合流地点として、二宮出張所では材木関連の取引が存在したのかもしれない。

なお、多摩銀行の役員は相当規模の株式を所有しており、青梅商業銀行の株を持つ者も多い。多摩銀行自体も青梅商業銀行株二〇株を所有しており、監査役一名が青梅商業銀行の取締役を兼任している。両行の間には一定の関係性が存在したことがうかがえる。

最後に、青梅商業銀行の頭取は、前述の通り村山平三郎で、最大株主でもあった。前身在「質会社」だけに、取締役に質業者が二名入っており、うち一名は多摩銀行監査役だった。青梅在住者は監査役の機業者一名にとどまり、埼玉県を含む周辺農村部の有力者が多い。入間郡金子村の加藤莊三郎を介して飯能銀行・飯能貯蓄銀行との人的関係が存在しており、表5でコレス取引は確認できないものの、青梅・飯能ともに織物の集散地であるので、その関係を反映したものであるろう。

(二) 株主

表7には、青梅町内三行の出資者数を出資総額別に

表7 総出資額別の出資者数(1909年上期)

総出資額	三行出資	青梅×多摩	青梅×青商	多摩×青商	青梅のみ	多摩のみ	青商のみ	計
10000円-		2			2			4
5000-9999	3	2		1	3	1		11
3000-4999	3	2		2	2	8	3	20
1000-2999	2	8	2	18	13	34	19	96
500-999		2	2	2	12	48	29	95
300-499		1			8	18	14	41
50-299					16	61	36	113
計	8	17	5	23	56	170	101	380

出所：各行「営業報告書」より作成。

整理した。三行への出資者三八〇名中、三行全てに出資している者は八名、二行は四五名であった。組み合わせとしては、多摩銀行×青梅商業商業が二三名と最も多く、青梅×青梅商業銀行は五名と最も少ない。経営者の兼任関係からも推測された多摩銀行と青梅商業銀行との相対的に密接な関係に照応するものだろう。

また、青梅銀行は出資者数が最も少なく、少数の資産家が大株主となっているのに対し、多摩銀行は零細多数の株主によって分散的に所有されている。零細預金を集める青梅銀行が、出資者構成では資産家依存で、多摩銀行と対照的であるというのは興味深い。

表8には、大株主と三行出資者の性格を示した。監査役を中心に、所屬行以外の銀行への株式投資も確認

表8 大株主・三行出資者の属性

氏名	住所	所有株数(株)			総出資額 (円)	職業	銀行役職
		青梅	多摩	青商			
田村半十郎	福生村	297			14,850	農、酒造業、青梅鉄道取締役	青梅監査役
福田甚五兵衛	三田村	216	45		13,050	材木卸	(青梅頭取小澤芳重の子)
澤田太平	三田村	226			11,300	酒造業、材木杉皮卸	
佐藤康剛	n.a.	79	123		10,100	—	(青梅取締役平岡実興の子)
平岡久左衛門	青梅町	196			9,800	織物買継業	
林正樹	三田村	140	50		9,500	旅人宿業	青梅監査役
山崎勘平	三田村	179			8,950	農兼商	多摩監査役、青商取締役 青商頭取、狭山商銀頭取
根岸善太郎	青梅町	155			7,750	織物生糸書籍商	
野崎伴蔵	霞村		90	44	6,700	質屋	多摩頭取
村山平三郎	箱根ヶ崎村	27		95	6,100	織物買継商	
山崎喜右衛門	青梅町		122		6,100	農業、金銭貸付業、質業、郵便局長	多摩頭取
桑田浜二郎	青梅町	58	54		5,600	荒物・石油商	多摩監査役、青商監査役 (1918年)
海藤慶蔵	青梅町	48	47	43	6,900	染料・小間物商	多摩取締役
野村五兵衛	吉野村	55	30	40	6,250	質屋、材木販売業	
青木八郎平	三田村	55	40	20	5,750	—	青商監査役
久保田森太郎	吉野村	40	25	25	4,500	蚕業・織物製造業	
宮岡兵吾	大久野村	27	30	22	3,950	医師	青商監査役
根岸定兵衛	n.a.	17	8	40	3,250	—	
井上徳兵衛	n.a.	27	20	12	2,950	—	青商監査役
海藤梅吉	n.a.	22	20	4	2,300	—	

出所：表6に同じ。

できる。青梅銀行の大株主は三田村に四名存在し、これは青梅町内の三名よりも多い。頭取である小澤家との関係によるものだろうか。多摩銀行最大株主の佐藤康剛の性格は残念ながら判明しなかったが、これに次ぐ大株主は頭取の山崎である。

同じく表8の下段に示した三行出資者もまた、その属性は必ずしも十分に明らかではない。根岸定兵衛や海藤梅吉などは青梅町在住と推測されるが、史料的な裏付けはない。多摩銀行と青梅商業銀行の役員には三行すべてに出資している者がいる一方、染料や織物といった青梅町周辺に根付いた繊維関係業者も多く、その資金需要の強さと資金力を物語っているものと考えられる。

おわりに

ここまで見てきたように、二〇世紀初頭に青梅町内に本店を置く三行は、それぞれに異なる性格を有していた。すなわち、山間部の資産家への依存度の高い青梅銀行が貯蓄部を通じた零細預金吸収に成功していたのに対し、多摩銀行は二宮出張所設置による商品担保

金融の多さに特徴があり、青梅商業銀行は外部銀行の出先機関的性格を有していた。改めて創業年順に設立の経緯を振り返って大胆に推測を加えると、青梅鉄道を中心に結集した西多摩郡内の資産家ネットワークに基づいて創設された最古の青梅銀行と、狭山商業銀行の出先機関的性格を持つ二番手の青梅商業銀行によっては十分に資金需要を満たされない質業者や織物関係業者が、最後発の多摩銀行に結集した、という経緯があったのかもしれない。織物買継商の機関銀行的性格を持つ青梅商業銀行と、青梅の織物業者を代表する井上倉吉が取締役を務める多摩銀行の間には、出資・役員を通じた一定の関係が存在していることも、青梅銀行によっては満たされぬ資金需要を、織維関係業者が有していたことを推測させる。こうして町内の三行は、地元の異なる資金需要に対応しながら事業を展開しており、二〇世紀初頭の青梅の金融市場は、金融機関が棲み分けつつもそれなりに競争的であったことを確認しておきたい。

なお、本稿では明治四二年上期が三行の『営業報告書』が同時に利用可能であるという史料制約により、

時期を限定して各行の性格を検討したにすぎない。特に一定の『営業報告書』が残されている青梅銀行と多摩銀行については、より立ち入った検討が必要であろう。今後の課題としたい。



こじま ようへい

東京大学経済学研究科准教授

あきる野市在住